

みていきなされ紙芝居

中山 時枝

悲しいことだけでも、何かが起こらなければ親も子も変わらない。追い込まれてはじめて生きていこうという覚悟が生まれるのだ。

口では子どものためと言っている、結局は親自身の見栄や世間体だったりする。

進学か就職か。担任にやいのやいのと言われて当時高校三年生だった二女は、気まじめな性格も手伝って、人生にはそのふたつの選択肢しかないのだと思いついていたようだ。

「わたし、やりたいこといっぱいあるし、将来何になりたいのかもさっぱりわからない。どうしたらいいんだろう」

夏休みの前になるとクラスの大半の者がそれなりにきちんと進路を決めていた。

「就職はしたくない！」

そんな彼女に対して教師はとりあえず何処か専門学校にでも入って、それからじっくりと考えるべきでしょうとアドバイスをくれた。親としてはサイコロを振って右か左かどちらかへ決めさせるようなことはさせたくなかったが、周囲と同じにしていれば、とりあえずは誰からもうしろ指さされず無難に生きていけるであろうとする大半の意見に流されてしまうような格好になってしまっていた。

それに対してめずらしく娘はきっぱりと「ノー」をつきつけた。

忘れもしない。

そう、あれは三年前の八月二十六日。

「帰りにトイレットペーパー買ってきて」

「うん、いいよ」

いつも通りに明るく笑ってピアノのレッスンに出かけて行ったのに、夜の九時をまわっても帰ってこないのだ。夜遊びの習慣などないので大騒ぎになった。夜勤だった父親も途中での帰宅を余儀なくされる。その時生まれてはじめて「搜索願い」なるものも書く。

深夜になって外はどしゃぶりの雨だ。

この雨の中をいったいどこで何をしているのだろう。そういえば静かなSOSはかなり前から発せられていた。たとえば部屋に置かれたゴミ袋。高校卒業を目前にして要らない物を整理したにしては多すぎる数であったが、まさかという感の方が強くて気づかぬふりをしてきた。こわかったのだ。

やさしさゆえか、小学生の時から「からかい」の対象にされつづけてきて、あえてそのクラスメートたちから逃れるように一人で進学を決めた高校でも同じようなことは起きていた。

大人の背をみて子は育つのである。

学校でも会社でも、発言力が強くて世慣れた者が弱い者をこてんぱんにやっつけて、それが当

たり前のような生活を日々送っているの、人間としてのやさしさも思いやりも、みんなどこかへ置き忘れてきてしまっているのだ。

心やさしい人々が自由に生きていけない社会というのは、いつか必ず自然にこわれていってしまふような気もする。

「学校、休んでもいいんだよ」

「いや、勉強したいから、行く」

こんな時、学校も教師も教育委員会も、まったく頼りにはならないことを身をもって知る。相手の親にかけ合ってみても

「いじめられる方にも問題があるのよ」

という返事が平然と返ってくる。

彼女の中で必死につつ張ってきたゴムが、もう限界に達してプチンと音をたててきれてしまったのだろうか。

現金もケータイも机の上にきちんと置かれてあって、唯一、持って出たのは「お守り」だった。いじめられている時もそれを握りしめて登校していた。

「ちくしょう！」

「ちくしょう！」

私は大声でわめきながら畳にこぶしをたたきつけた。

「部屋の電気は全部つけておけ！」

深夜二時、突然夫が大声でそうわめいた。

なすすべもなく時間だけが過ぎていく。

勤務先の居酒屋に電話を入れる。

しばらく休ませてほしいと頼んだら、料理長が理由を聞いてきたので、正直に話した。

「しっかりしろよ、おれもこれから帰るところだが、車をそっちへ廻して捜してやるからな！」

私達は多分これで立ち直れないだろうと思った。

正直にまじめにみんなしてやってきたのに、何故、神様はこんなにも重い十字架を背負わせてくるのだろうか。

私の父もとても信心深い人で、占いの真似ごとのようなこととして近所の人たちから重宝がられていたものの、貧しい生活のままガンを患い他界している。

午前三時。

「今、冷蔵庫の前でふわっと白い影が動いた」

途中から合流して身じろぎもせず座り込んでいた長女がすつとんきような声をあげた。

その時、けたたましく電話のベルが鳴る。

一番近くにいた長女が受話機にとびついた。

「今、どこにいるの？」

近くの公衆電話かららしい。

幸い娘は自分の足で歩いてもどつてきてくれた。全身をやブ蚊に刺されてひどい状態ではあったが、そんな所でママシにくわれなかったのが不思議だ。

「草むらで寝ていたら、誰かがオーイオーイって呼ぶから目がさめた」と言う。
雨にもぬれていなかった。

「お守り」がピカピカ光って暗い道もこわくなくなったそう。きつと神様がまだ早いよと教えて下さったのだろう。神も仏もあるもんかと散々文句を言ったことをひどく後悔した。

キズの治療をしてくれた医師から心療内科への受診をすすめられてその通りを試みたが、どこも予約でいっぱい一ヶ月待たされた。そしてようやく受診してみると、一枚の間診票に〇か×を記入させられ、あとは簡単な会話のやりとりがあつて病名が決まる。そして、山のような薬も処方される。

「薬を途中でやめるとリセットされますからね」というおまけまで付いて、弱った心は不安のダブルパンチをあびるのだ。

もらった薬は全部ゴミ箱に放り投げた。

冗談じゃあない。あなたに一体何がわかる。

これくらいのことでは病人扱いされちゃあたららん。

けれどそうは言っても娘がストレスを抱えていることは事実なので、インターネットでみつけ

た漢方医の門をたたいてみた。

「こだわりの強い性格は薬じゃ治らないかもしれないねえ。でも、まあとりあえず肩の力を抜いて、ほら、そんなしなめつ面をしていないで、まっいいかって思うことも必要だよ」

一時間もかけてじっくりと話を聞いてもらったら、それだけで明るい顔になっていた。

高校を卒業後、娘はあえて他人とは違う道を歩くと決めた。

「絵でめしを食っていくのは大変だよ」

担任の言うことに間違いはなかった。

その日から背中には「ニート」というレッテルが貼られ、近所の人々の好奇の目にもさらされることになる。

「あら、きょうは学校はお休みなの？」

「そう、絵の勉強ね、どちらの美大？」

前を向いてしっかりと自分の足で歩いている人は決してこういう低レベルな会話をしないのだと娘に言っただけで聞かせた。

絵本や童話を書いて投稿するも、すべて落選。作品に登場するキャラクターは、世の中から忌み嫌われているダンゴ虫やカメ虫たちで、ストーリーも誰も思いつかないような奇想天外なファンタジーなので、なかなか受け入れられないようだ。それより何より世の中そんなに甘くはないということである。

自分ひとり世の中から忘れられ、置きざりにされてしまっているかのような不安と焦燥感が彼女におそいかかってくる。

そんな時、キャラクターがあまりにも元気がよすぎて絵本の中でじっとしていられなくなったのか、娘は声色を使いわけてキャラクターたちを演じわけるようになっていった。

「それならいつそのこと紙芝居をやってみたら？」

さあ さあ さあ さあ

みていきなされ 紙芝居

坊ちゃん 穰ちゃん

父ちゃん 母ちゃん

浮世の垢を落としなさい

ほんのひととき

あなたのところを

ねんねこぼんでんで

包みましようぞ

百円均一で買った太鼓を鳴らしながら娘が先頭を歩き、ひよっとこのお面に豆しぼりの手ぬぐ

いではつかむりをした私がおのあとにつづく。第一回の「多摩くらふとフェア」に招待されて「あけびカンパニー」のグループ名で親子紙芝居を演じることになったのでそのデモンストレーションなのだ。

紙芝居始めて一年、発表への道は予想以上に厳しくて邪険に扱われたり、変人扱いされることもある。

「あなたは子どもを生んだことがないから、きつと子どもの気持ちなんかわからないわよね。きちんと年齢設定をして作品を書いていかないと見る側が飽きてしまうのよ」

各学校を廻って読みきかせをしている女性からはそんなアドバイスもいただいたが、キラキラと目を輝かせてみてくれる子どもたちの感性を信じて娘は黙々と作品を作りつづけている。ボランティアなので一銭にもならないが、子どもたちからはそれ以上のものをもらってきた。大人のように意地の悪いへ理屈なんか言わないし、つまらなきゃつまらないと態度で示してくれるから良いバロメーターとなる。

くらふとフェアの日、ある番組制作会社のディレクターが重いカメラをぶらさげて、ずっと撮ってくれていた。ドキュメンタリーの企画が持ちあがって、めずらしい二十一歳の女性紙芝居師の日々を追いたいとのことだが正直いってそんなことはどうでもいいのだ。

娘が人生にピリオドをうつ決心をした時、それは親としても人生をやり直す時期であった。

父親はタンスの奥から資料を持ち出してきて二女に見せた。父方の先祖は秋田藩の藩校である

「明德館」の初代祭酒を命ぜられた中山文右衛門青莪という人で、町医者であり、郷村奉行や大番組頭としても活躍したのだと知らされる。ルーツがはっきりしていることに感謝しなければならぬ。

まがりくねった道をまっすぐに進もうとするから無理が生じるわけで、あっちへウロウロ、こっちへウロウロ寄り道することも必要だ。これから先のことを考えると心配じゃないと言えば嘘になるが、娘には甘ったれてもらっちゃ困るので時にはなぐりあいのケンカにもなる。親も子も必死なのだ。

どんなに辛くとも明日という日は否応なしにやってくるから、そうなると前を向いて歩いて行くしか他に方法もない。

親は子にありのままをさらけ出して、気取らず無理せず、他人をいじめるだけの人生がいかにかバカバカしくもつたないかを説いて聞かせる。

つかず離れず、親ばなれ子ばなれも自然の形が一番だと思う。

突然暗いトンネルに放りこまれてもがき苦しんだが、娘のおかげで数々の貴重な体験をさせてもらい、人間にとつて一番大事なものが何かに気づかせてもらった。

ここからありがとうを言いたいと思う。